

アルベール・カミュ『異邦人』における他者の手

阿部いそみ

『異邦人』の主人公ムルソーにおける他者からの隔絶性をめぐって、触覚という視点（他者の手の主人公への接触）を導入し考察した。この視点は習作時代の小説「直観」に描かれた一節（手の接触により他者の存在をはじめて確信する箇所）にもとづき、そこから発展的にアルベール・カミュの作品を捉えようとする試みである。分析を通し、『異邦人』第一部で数カ所に描かれている主人公との握手が第二部では1カ所にとどまることや、他者の手が接触する身体部位が「手」から「手首」へ、さらに最終章の結尾では「肩」へと変化することを見出した。他者の手が肩に接触した直後に描かれるのは、主人公が突然感情を露出させる場面である。主人公はその際「両手がからっぽだ」と象徴的に言い放つ。この作品における他者からの隔絶性、つまり他者の存在を認識できない状況は、主人公の手が他者の手と非接触であるという様相を伴い提示されていることが明らかになった。

序

アルベール・カミュの作品世界における他者の認識をめぐる問題に関して、なかでも『異邦人』の主人公ムルソーの他者からの隔絶性をめぐり、これまでさまざま論じられてきた。例えば、ブライアン・フィッチは、ムルソーと他者とのあいだの超えることができない深淵を「存在論的な次元のもの」¹であると評した。またリオネル・コーンは、ムルソーに「他者との差異の拒絶」²の感覚を見出しうるとし、さらにヴァン・デン・フーベルにおいては、レエモンが登場する場面をとりあげ、そこにムルソーと他者との「完璧な同一化」³を認めている。

ところでアルベール・カミュの習作時代の小説「直観」の中に、次の一節がある。

ぼくの反省がそこまで進んできたとき、ぼくは、自分の手の上に載せられた狂人の手を感じた。そしてこうした手の接触はぼくに外部の存在を思い起こさせたが、おかげでぼくの心の中には、一つの新しいひらめきと新しい予知が浮かびあがってきた。⁴

主人公「ぼく」は、手の接触を通じて外部の存在を認識している。他者を認識する

契機をもたらしたのは、手の接触という皮膚感覚である。

皮膚感覚は、人間にとってどのような意味を持つのか。傳田光洋⁵が述べているように、誕生後、外部の世界を最初に認識する方法とは皮膚感覚である。人間の視覚はすぐには役立たない。また大森莊蔵も次のように指摘する。

「…」 どうして「さわれる」ということが現実と幻の識別の原理にされているのだろうか。それはほかでもない、「さわる」ということこそ現実性の核心だからである。「…」 「さわる」ということは人間の命の攻防の場なのである。⁶

「さわる」という触覚こそ現実感覚を担っている。大森莊蔵はバークリィの『視覚新論』における「倒立像」について論じた中でも同様の見解を明らかにしている。

「…」 触覚世界こそ人間の生きる世界であり（それには私は賛同する）、視覚は単に補助的な道案内人なのである。だから視覚像としての網膜像は触覚世界との比較において「倒立」しているとか、その他いかなる位置関係を言うことも無意味である、と。これがバークリィの主旨である。⁷

触れるという感覚こそ、確かな現実を認識する手段である。それは傳田光洋の言葉を用いるならば「最も信頼できる世界認識の機能」⁸である。皮膚感覚は、人間にとって誕生後の最初の認識であり、視覚にもまさる最も信頼できる世界認識の機能である。

本稿では、小説「直観」⁹中の手の接触による他者の認識が描かれたくだりを通して、『異邦人』について触覚¹⁰という視点から他者の問題を論じうる可能性を見出した。具体的には、手の接触という皮膚感覚が『異邦人』において持つ重要性を明らかにすることを目的としている。

以下の考察では、接触がムルソー側からのものと、他者から発したものに区分することからはじめた。また他者からムルソーへの接触については、まず『異邦人』第一部におけるムルソーと他者との手の接触について分析した。そして第二部については、公判の場面における手の持つ意味について考察するとともに、手の接触をめぐる状況の変化や、最終章に描かれた手の重要性について分析を進めた。

I ムルソーの手と他者の手

1 ムルソーに発する接触

『異邦人』全体を通じて、ムルソー側からはたらきかけて、他者の手との接触が具体的に描写された箇所は見出すことはできない。ただし、ムルソーが手を差しのべようとする箇所については1カ所ある。第二部第1章の予審判事の部屋を出る場面¹¹である。

部屋を出るとき、私は彼に手を差しのべようとさえしたが、ちょうどそのとき、自分がひと殺しをしたことを思い出した。(I, pp. 177-178)

ムルソーは、予審判事と握手しようとする。しかしそれを考えた直後、自分が殺人を犯したことを思い出し踏みとどまっている。このようにムルソー側からはたらきかけた手の接触については、作品中には存在していない。

次に、他者からムルソーへの手の接触についての状況を記す。

2 他者に発する接触

他者からはたらきかけてムルソーとの手の接触が描かれる場面をめぐって、『異邦人』第一部と第二部に区分し述べていく。以下ではまず、第一部でのムルソーが握手をもとめられる場面について扱う。そして次に第二部での握手について記すとともに、手の接触に関するある変化の状況について明らかにする。

1) 第一部でムルソーが握手をもとめられる場面

『異邦人』第一部において、主人公ムルソーが握手をもとめられる場面は4カ所¹²である。握手の相手は、養老院の院長、養老院の老人たち、アパートの隣人レエモン、及びサラマノ老人である。以下では、これらの場面に描かれた主人公ムルソーをめぐり、そこに共通して見出される特徴を示していきたい。

①養老院の院長との握手

第一部第1章には、養老院の院長がムルソーと握手をする場面がある。

それから院長に会った。その事務室で彼は私を迎えた。小柄な老人で、レジオン・ドヌールを着けていた。明るい眼で彼は私を見た。それから私の手を握りどうして手を引き込ませようかと困ったほど長く、離さずにいた。(I, p. 142)

養老院の事務室で、ムルソーは院長にはじめて会う。院長はムルソーの手を握るが、その握手に対してムルソーは、「どうして手を引き込ませようかと困ったほど長い」という当惑の思いを明らかにしている。

②養老院の老人たちとの握手

第一部第1章には、養老院の老人たちとの握手の場面も描かれている。通夜が終わって老人たちが部屋から出て行く箇所である。

門衛が出かけようといった。彼らは立ちあがった。このやっかいな通夜のために灰色の顔をしていた。出てゆくとき、驚いたことには、ひとり残らず私の手を握った—まるで、一言もかわさなかったこの一夜のために、われわれの親しみが増したかのように。(I, pp. 146-147)

養老院の老人たちは皆、部屋を出る際にムルソーの手を握る。これについてムルソーは、「驚いたことには、ひとり残らず私の手を握った」と驚きの思いを表している。

養老院の院長との握手、そして養老院の老人たちとの握手は、それぞれ戸惑いや驚きという感情の違いはあるが、他者との手の接触という行為がこの作品において持つ重要性を物語っているのではないだろうか。それは次に示すように、アパートの隣人

レエモンとの握手の場面でも見出される特徴である。

③レエモンとの握手

ムルソーはアパートの隣人レエモンの部屋で、レエモンからの依頼で手紙を代筆する。手紙を書き終えてムルソーが部屋を出るくだりは、次のように描かれている。

私は立ちあがった。レエモンは強く強く私の手を握り、男同士のあいだなら、いつだってわかり合えるものだ、といった。(I, p. 160)

レエモンがムルソーの手を握る状況について、「強く強く」という修飾語句が付いている。それは先に見た、養老院の院長との握手において「どうして手を引き込ませようかと困るほど長い」、さらに養老院の老人たちが全員ムルソーの手を握った状況について付けられた「驚いたことに」という語句と同様に、他者との手の接触がこの小説において何らかの意味を有することを示している。

次に、アパートの隣人サラマノ老人について扱う。

④サラマノ老人との握手

「サラマノ」とは、カール・A・ヴィジャーニも指摘するようにイタリア風の名前であり「汚れた手」(mains sales)¹³を意味するが、作品中でも「瘡蓋だらけの手」(mains croûteuses) (I, p. 163) を持つ汚れた手の老人として登場する。サラマノ老人との握手は、第一部第5章の結末部に描かれている。

老人と知り合ってからのはじめてのことだが、こそこそした仕草で、私に手を差し出した。私は彼の皮膚の鱗を感じた。老人はにやりと笑い、部屋を出る前に、私に向かって「今夜は犬どもが吠えないといいんだが、そのたんびに、うちの犬じゃないかと思うんだよ」といった。(I, p. 168)

サラマノ老人はムルソーに手を差し出し握手する。この握手について、「老人と知り合ってからのはじめてのことだが」という説明が添えられている。先に述べた養老院の院長との握手、養老院の老人たちとの握手、レエモンとの握手に続いてここでも同様に、『異邦人』における他者との手の接触が何らかの特別な意味を持つことを示唆している。

ところで、上記のサラマノ老人との握手が描かれる場面のうち、「私は彼の皮膚の鱗を感じた」のくだりは、アルベール・カミュの習作時代の小説「直観」にある次の一節との類似が見られる。

[...] 彼はぼくの手を取っていた。そしてぼくは指の下に、とても年老いた皮膚を感じていた。少なくともぼくはその皮膚を年老いていると思っていたが、それがなぜかは言えなかったろう。(I, p. 949)

この箇所は、サラマノ老人との握手の場面と同様に、他者からの手の接触があるということ、そしてその他者の手の感触への言及があるという共通点がある。さらに、

この手の接触の相手はサラマノと同じく年老いた男性でもある。主人公への手の接触は、「直観」中、次の箇所にも見出される。それは、本稿冒頭でも言及したくだりである。

ぼくの反省がそこまで進んできたとき、ぼくは、自分の手の上に載せられた狂人の手を感じた。そしてこうした手の接触はぼくに外部の存在を思い起こさせたが、おかげでぼくの心の中には、一つの新しいひらめきと新しい予知が浮かびあがってきた。(I, p. 952)

この一節で留意すべきは、他者からの手の接触という行為をめぐって、それが何を意味するのであるかが明らかにされているということである。「こうした手の接触はぼくに外部の存在を思い起こさせた」とあるように、主人公に与えられた手の接触という皮膚感覚は、外部の存在、他者の実在性を明確に認識することにつながっている。

『異邦人』に描かれた手の接触についても、外部存在としての他者の認識に関連するのだろうか。これを明らかにするにあたって、『異邦人』第二部における手の接触の場面も検討することを通して考察を進めたい。

2) 第二部における手の接触：公判を枠づける「手」

ムルソーと握手する他者は、第二部第3章に見出される。

弁護士が法服を着け、大勢の同僚に囲まれてあらわれた。彼は記者たちのところへ行って握手した。彼らは冗談をいったり笑ったりして、全く気楽な様子だったが、そのうちにベルが廷内に鳴りわたった。皆、自分の席へ戻った。弁護士は私のそばへ来て、手を握り、そして質問をうけたら手短かに答えるように、こちらからイニシアチブをとらないように、また、その他のことについては自分に任せてくれるように、と勧めた。(I, p. 190)

これは、公判の開始を告げるベルが法廷内に鳴りわたったあとに、弁護士がムルソーと握手をしようとやって来る場面である。第二部でのムルソーの握手の描写は、この1カ所のみである。ムルソーに向けた他者の手の接触は第二部第4章結尾にも描かれるが、そこでは握手ではなくムルソーの手首への接触である。次の場面である。

再びベルが鳴り、被告席の扉がひらかれたとき、私の方へ押しよせたのは廷内の沈黙だった。[……] 裁判長が奇妙な言葉つきで、あなたはフランス人民の名において広場で斬首刑をうけるのだ、といったからだ。[……] 憲兵たちは私にやさしかった。弁護士は私の手首にその手を載せた。私はもう何も考えてはいなかった。しかし、裁判長は何もいい足すことはないかと尋ねた。私は考えてみた。私は「ないです」といった。そのとき私は連れてゆかれた。(I, pp. 203-204)

この箇所は、公判で死刑執行判決が下される閉廷の場面である。ムルソーへの他者の手の接触は、開廷の場面、及び閉廷の場面に現れている。「手」を意味する単語 main は、「権力」や「権限」の意味も有するが、死刑執行判決を下した公判は、この

ような権力の象徴としての手によって粹づけられている。つまり手の接触は、主人公の死を決定した場面を粹づけるものであり、『異邦人』において極めて重要な意味を持つことを示している。

尚、先述のように、『異邦人』第二部においてムルソーの手に接触する他者の手は、上記の2カ所に限定されている。第二部第3章の開廷の場面では握手というかたちだが、第二部第4章の開廷の場面ではムルソーの手首の上への接触へと変化が生じている。このような他者の手の接触をめぐる変化は、『異邦人』最終章に至るとさらに異なる様相を呈していく。以下では、『異邦人』第二部での変化と同時に見出される状況を提示しつつ、最終章における手をめぐって述べていく。

Ⅱ 第二部における手の接触の変化

1 人々のあいだで交わされる握手

前章で述べたように、第二部の開廷の場面では「ムルソーとの握手」が描かれていたが、開廷の場面になると「ムルソーの手首の上への他者の手の接触」へと変化している。「握手」から「手首の上への手の接触」という変化は、ムルソーが他者との距離が広がり、他の人々から孤立した存在であることを象徴的に示すのではないだろうか。ムルソーとの握手が描かれなくなる一方、ムルソー以外の登場人物間で交わされる握手については、次のように描かれている。

それはまず、第二部第3章で被告席にムルソーが着席し、憲兵と短い会話を交わす場面にある。

憲兵は新聞記者の一人と知り合いだったが、このとき記者が憲兵に気づいて、われわれの方へやって来た。もうかなり年配の男で、少ししかめ面をしていたが、感じがよかった。彼は「大そう熱っぽく」憲兵の手を握りしめた。(I, p. 189)

新聞記者は、「大そう熱っぽく」憲兵と握手する。この新聞記者はムルソーとは握手をしていない。

記者は私に向かって、ちょいと手で打ちとけた合図をして、われわれを離れて行った。(I, p. 190)

この新聞記者は、ムルソーに対しては手での合図をしている。「打ちとけた」という修飾語句が付けられた合図ではあるが、同じ人物による「大そう熱っぽい」握手がこの箇所の直前に描かれているゆえに、接触を伴わない挨拶はムルソーの孤立した立場を描出する効果を生み出している。

ムルソー以外の人々のあいだで交わされる握手は、第二部でムルソーとの握手が描かれる直前の一節にも見出される。

弁護士が法服を着け、大勢の同僚に囲まれてあらわれた。彼は記者たちのところへ行って、握手した。彼らは冗談をいったり笑ったりして、全く気楽な様子だっ

たが、そのうちにベルが廷内に鳴りわたった。みな自分の席へ戻った。弁護士は私のそばへ来て手を握り […] (I, p. 190)

開廷のベルが鳴った直後にムルソーと握手した弁護士は、ベルが鳴る直前に複数の記者と握手をしている。この弁護士は「大勢の同僚に囲まれてあらわれ」、また記者たちとの握手の状況は「冗談をいったり笑ったり全く気楽な様子だった」と描かれている。そのためここでの弁護士の握手は、楽しさや賑わいを伴ったものであるといえる。他方、ムルソーとの握手については、ベルが鳴った直後の開廷前の静けさのなかに描かれるゆえに、被告人ムルソーの孤立性をより明確化するものとなっている。

この弁護士の握手については、第二部第4章の次の箇所にも描かれている。

法廷は審問を中止し、弁護士は精根つきはてた様子で腰をおろした。しかし同僚たちがやって来て彼の手を握った。「立派なものだ、君」という声がした。その一人は私の証言を求め、「ね、そうでしょう」といった。私は同意した。が、あまり疲れていたもので、私の賛辞には心がこもっていなかった。(I, p. 202)

ここで弁護士が握手した相手は数名の同僚であるが、この弁護士はムルソーとも握手をしている。そしていずれの場面でも「相手の近くにやってきて握手をする」という共通要素を持つ。そのため、それぞれの箇所で使用されている単語も、次に示すように共通する。

＜ムルソーとの握手＞ Mon avocat est venu vers moi, m'a serré la main[...]

(I, p. 190)

＜同僚たちとの握手＞ [...]ses collègues sont venus vers lui pour lui serrer la main.

(I, p. 202)

いずれにも、動詞「来る」(venir) や前置詞「～の方へ」(vers)、そして「手を握る」(serrer la main) という表現が用いられ、ほぼ同じ構成の文であるため相違点がより明確になっている。ムルソーが握手する相手は、弁護士一人である。他方、弁護士が握手する相手は、一人ではなく数名の同僚である。弁護士が同僚と握手するこのくだりが存在することによって、ムルソーの孤立性を確認することにつながっている。

このように『異邦人』第二部において手の接触が描かれている場面は、ムルソー以外の人々の握手の箇所であっても、ムルソーが他者から隔絶し孤立した存在であることの提示につながっている。

次に、最終章における様相を考察する。

2 『異邦人』第二部最終章における手

先に見たように、『異邦人』第二部第4章の開廷の場面には、他者の手がムルソーの手首の上に置かれる場面がある。そこでは「握手」というかたちから、「手首の上への手の接触」という変化があった。他者の手が主人公ムルソーに接触する場面は、最終章になってようやくあらわれる。それは、最終章の突然小説のトーンが変わり、ムルソーが感情を露わにして叫び続ける有名な箇所である。トーンが変わる直前の、

刑務所付司祭の様子から以下に引用する。

「いいや、わが子よ」と彼〔刑務所付司祭〕は私の肩に手を置いていった。「私はあなたとともにいます。しかし、あなたの心は盲いているから、それがわからないのです。私はあなたのために祈りましょう」そのとき、なぜか知らないが、私の内部で何かが裂けた。私は大口あけてどなり出し〔…〕私は法衣の襟首をつかんだ。喜びと怒りのいり混じったおののきとともに、彼に向かって、心の底をぶちまけた〔…〕(I, p. 211)

ムルソーが突然激昂する直前、刑務所付司祭はムルソーの肩¹⁴に手を置いている。他者の手の接触は、第二部第4章においてはムルソーの「手首の上」への接触であった。しかしこの最終章になると、他者の手が接触した身体部位は主人公の肩である。「手首の上」から「肩」への変化は、主人公と他者との距離が大きくなったことを示すのではないだろうか。

また、ムルソーは激昂しながら叫んだ際、刑務所付司祭の襟首をつかむ。この襟首をつかむという動作は、叫びが終わるまで続いている。

〔…〕 こうしたすべてを叫びながら、私は息がつまってしまった。しかし、すでに司祭は私の手からひきはなされ、看守たちが私を脅かしていた。(I, p. 212)

このように小説最終章のムルソーの激昂箇所には、まず刑務所付司祭の「手」がムルソーの肩に置かれるという行為が描かれる。そしてその直後に激昂の叫びが始まるが、その際ムルソーの「手」は、司祭の襟首をつかんでおり、叫びの終わりまで続いている。

刑務所付司祭の「手」は、ムルソーと独房ではじめて対面した場面で次のように描写されている。

まさにこのとき司祭が入って来た。彼の姿を目にすると、私はちょっと身震いした。司祭はそれに気づいて恐れないようにといった。〔…〕私の祖末な寝台に腰かけて、彼は自分のそばに来てすわるようにすすめた。〔…〕前腕を膝に置き、うなだれて、彼はしばらくそこに腰かけたなり、自分の手を見つめていた。その手はほっそりと、筋張っていて、敏捷な二匹の獣を思わせた。司祭はしずかに両手を互いにこすり合わせた。それから、相変わらず頭をたれたまま、じっとしていた〔…〕(I, pp. 208-209)

この場面は、刑務所付司祭がムルソーにはじめて対面する箇所であるのみならず、『異邦人』において刑務所付司祭がはじめて登場するくだりでもある。「自分の手を見つめていた」にはじまりその手について「ほっそりと、筋張っていて、敏捷な二匹の獣を思わせた」と詳細な形容がされている。また「しずかに両手を互いにこすり合わせた」と手をめぐる丹念な描写が続く。さらに数行後の箇所にも、「手」という言葉を用いた行動描写がある。

すると彼はうしろに反りかえって、平手を腿に置き、壁に背をもたせかけた。
(I, p. 209)

このとき、彼の手がいらした仕ぐさを示したが、彼はからだを起こして、その法衣の皺を直した。(I, p. 209)

『異邦人』の登場人物のうち、その手¹⁵がこれほど詳細に繰り返し描写されている人物は他に見出されない。特に「自分の手を見つめる」という動作の描写は、作品全体で刑務所付司祭に関するこの一節に限定されている。刑務所付司祭の「手」は、最終章の激昂箇所を形作る重要な役割を担うゆえに、作品に登場した段階から伏線として入念に描き込まれているといえる。

『異邦人』第一部での他者の手は、握手というかたちで主人公ムルソーの手に何度も接触している。そのことによって、主人公は他者の実在を確信することができた。しかし『異邦人』第二部になると、他者の手が握手のかたちで接触するのは1回にとどまり、接触の身体部位についても主人公の手首の上に変化する。さらに最終章では肩への接触である。そして肩への接触を契機とするかのようにして、小説のトーンは突然変わる。

尚、最終章において、激昂したムルソーが叫ぶ言葉の中に次の表現がある。

君はまさに自信満々の様子だ。そうではないか。[……] 君は自分が生きているということにさえ、自信がない。私はといえば、両手はからっぽのようだ。しかし私は自信を持っている。自分について、すべてについて、君より強く、また私の人生について、来たるべきあの死について。(I, p. 211)

「両手はからっぽのようだ」(j'avais l'air d'avoir les mains vides) という表現は、よりどころとする確固としたものを持っていないという抽象的な意味で用いられているものの、単語として「手」(main)が使われている。この言葉を発しているとき、ムルソーの「手」は司祭の法衣の襟首を掴むというかたちで、他者に接触している。「両手はからっぽのようだ」とは、『異邦人』第一部に見出された様相、換言するならば「ムルソーの手が握手というかたちで他者の手との接触をしている状態ではない」、ということを暗に示すものである。第二部第1章には、ムルソーから他者に向けて手を差し出そうとした場面があったが、それは他者の実在をみずから探ろうとしたことではないだろうか。そして最終章で「両手がからっぽのようだ」とは、手という皮膚感覚を通して他者の実在を確信できない状態への嘆き、として解釈することができる。

結

以上において、『異邦人』の主人公ムルソーにおける他者からの隔絶性をめぐって、触覚という視点から考察を行った。この視点は、習作時代の小説「直観」で見出された点、すなわち手の接触をきっかけとして他者を認識する場面から発展的にアルベール・カミュの小説を捉えようとする試みである。『異邦人』第一部では、他者の手は

「握手」すなわち手と手との直接の接触というかたちで、ムルソーとの接触が数カ所にわたって見出された。しかし第二部では「握手」というかたちの接触は1カ所にとどまる。そして他者の手の接触する身体部位は、「手」から「手首」へ変化し、最終章の結尾では「肩」となる。また他者の手が肩に接触した直後に描かれるのが、ムルソーが突然感情を露出させて叫び続けるくだりである。ムルソーは、叫び続ける中で「両手がからっぽだ」と象徴的に言い放つ。他者からの隔絶性、つまり『異邦人』において主人公が他者認識に至ることができないという状況は、主人公の手が他者の手と非接触であるという様相を伴い提示されていることが明らかになった。

尚、本稿ではアルベール・カミュの作品のうち、『異邦人』のみを対象として分析をした。他の作品をめぐる考察については、別稿に譲りたい。

注

1. «[...]ce gouffre est d'un ordre ontologique.», Brian T. Fitch, *Le sentiment d'étrangeté chez Malraux, Sartre, Camus et S. de Beauvoir : "étranger à moi-même et à ce monde"*, Lettres Modernes, 1964, p. 213.
2. «[...]le refus de la différence avec l'Autre[...]», Lionel Cohn, «La signification d'autrui chez Camus et chez Kafka, tentative de lecture de Camus et de Kafka d'après la philosophie d'Emmanuel Lévinas», *Albert Camus 9, la pensée de Camus*, Revue des Lettres Modernes, 1979, p. 105.
3. «L'identité de Meursault et de Raymond est parfaite.», Pierre Van Den Heuvel, «Parole, mot et silence : les avatars de l'énonciation dans *L'Étranger* d'Albert Camus», *Albert Camus 10, nouvelles approches*, Revue des Lettres Modernes, 1982, p. 77.
4. Albert Camus, *Œuvres complètes I 1931-1944*, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 2006, p. 952. 以下 I と略記し頁数と共に示す。尚、小説「直観」の訳出に際し次の邦訳を主に参考とした：高島正明訳『直観』、新潮社、1974。
5. 「皮膚感覚は個々の意識を受けやすいものですが、視覚の代わりを担えるのです。つまり私たちの論理的思考を構築するに足る、外部世界の情報を私たちに提供しうる感覚なのです。人間の視覚は、誕生後すぐには役に立ちません。視覚によって物体の形、質感、距離感などを認識するようになるためには、誕生後、まず物体に触れ、その皮膚感覚と視覚映像とを結びつける学習が必要なことを、いくつかの発達心理学的な研究が指摘しています。結局、外部の世界を最初に認識するのは皮膚感覚なのです。」(傳田光洋『皮膚感覚と人間のこころ』、新潮社、2013、p. 105)。
6. 大森荘蔵『流れとよどみ－哲学断章－』産業図書、1981、p. 3。
7. 同書、p. 146。
8. 「個人の認識と、実在との関係を突き詰めていくと、結局、頼りになるのは皮膚感覚である、という結論にたどり着くのです。皮膚感覚は自他を区別するだけでなく、最も信頼できる世界（自己を含む）認識の機能であると言えます。」(傳田光洋、前掲書、p. 151)。

9. ジャクリヌ・レヴィ＝ヴァランシ（Jacqueline Lévi-Valensi, *Albert Camus ou la naissance d'un romancier*, Gallimard, 2006, pp. 56-80）等、小説「直観」の中に『異邦人』の萌芽的要素を指摘する諸研究がある。これに関して拙稿（『アルベール・カミュの「直観」と『異邦人』, 『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要』第2号、2012、pp. 91-106）も参照されたい。
10. 触覚に関して次の図書も参考とした：山口創『手の治癒力』草思社、2012；傳田光洋『賢い皮膚：思考する最大の〈臓器〉』、筑摩書房、2009；傳田光洋『第三の脳：皮膚から考える命、こころ、世界』朝日出版社、2007；傳田光洋『皮膚は考える』、岩波書店、2005。
11. 『異邦人』の訳出に際し次の邦訳を主に参考とした：窪田啓作訳『異邦人』、新潮文庫、1954。
12. 小説全体では、第二部第3章の1カ所を合わせて5カ所である。
13. Carl A. Viggiani, «L'Étranger de Camus», *Configuration critique d'Albert Camus I, L'Étranger à l'étranger : Camus devant la critique anglo-saxonne Revue des Lettres Modernes*, N^{os} 64-66, 1961, p. 114.
14. 小説全体では、第二部第1章にもムルソーの肩に触れる他者（ここでは予審判事である）が描かれている：「[...] 予審判事がその部屋の戸口まで私を送って来て、私の肩をたたき [...]」（I, p. 182）。
15. 「手」を意味する単語mainは、『異邦人』中47カ所で用いられている。47カ所の内訳について、登場人物ごとの回数を括弧内に記し以下に列挙する：ムルソー（12）、刑務所付司祭（5）、サラマノ老人（3）、浜辺のアラブ人（3）、セレスト（3）、弁護士（3）、葬儀屋（2）、レエモン（2）、ある新聞記者（2）、養老院院長（1）、通夜で杖を持っている老人（1）、場末町を歩く男（1）、マソン（1）、予審判事（1）、憲兵（1）、法廷内の小柄な青年（1）、検事（1）、刑務所面会室の老女（1）、刑務所面会室の男（1）、万年筆を手に持った新聞記者たち（1）、父親殺害の男（1）。尚、『異邦人』における「手」（main）の使用頻度について次の図書を参照した：Herausgegeben von Manfred Sprissler unter Mitwirkung Hans-Dieter Hänsen, *Albert Camus Konkordanz zu den Romanen und Erzählungen*, Band II, Georg Olms, 1988.

